論文の内容の要旨

論文題目　　言語接触と言語変異

—中国黒龍江省ドルブットモンゴル族コミュニティー言語を事例として—

氏名　　包　聯群

本研究は、今まで記述されたことのない中国黒龍江省ドルブット（杜爾伯特）モンゴル族コミュニティー言語（Dorbed Mongolian Community Language、「接触言語」）の記述を行うことを主な目的とした。中国黒龍江省ドルブッドモンゴル族自治県は、黒龍江省における唯一のモンゴル族自治県であり、黒龍江省のモンゴル族の三分の一を占める４万人以上が集中して居住する地域でもある。ここで暮らすモンゴル族の多くは日常的にモンゴル語の形態要素と中国語の語彙要素が混合した言語を話している。例えば、1）の第一人称代名詞 [bi:]「私」、テンス語尾を示す [-nɑ:] はモンゴル語が起源であるが、名詞“电话 diànhuà”「電話」、動詞“打 dǎ”「打つ」は、中国語が起源である。2）の〔lɑ-b-辣-di:〕「とても辛い」はモンゴル語とも中国語ともかなり異なっており、この表現には中国語起源の形容詞“辣 là”「辛い」とモンゴル語形容詞の強意形接辞 [-b-] が含まれている

1) bi:　电话　打-nɑ:.
　1SG 電話　かける - NPT
　（私が電話をかけます。）

2) ən　nɔvɔ:　lɑ-b-辣-di:.
　この　料理　辛い.INT - DE
　（この料理はとても辛いです。）

本研究は全九章から構成されている。序章では事例研究を紹介し、本研究で取り上げる課題を提起した。第２章ではドルブットモンゴル族をとりまく教育的・社会的状況を概観し、第３章では DMCL の音韻的・形態的・統語的特徴を分析した。第４章から第６章では、バイリンガル動詞、バイリンガル形容詞、DMCL の名詞を考察した。第７章では、ドルブットモンゴル族の言語使用と言語意識等を考察し、第８章では Bakker and Muysken（1994）、Bakker（2003）等が提示した混合言語（Mixed Language）という概念に基づき、混合語論争と DMCL の位置付けを試みた。第９章では本研究の内容をまとめた。

以下、本研究で明らかにした点を述べる。

（1）DMCL を話す人々の教育状況と言語生活

ドルブットモンゴル族が居住する地域には、1904 年の「蒙地開放」政策およびその後の移民政策等によって漢民族が大量に移住してきた。この地域のモンゴル族が DMCL を話すようになった背景には、モンゴル語による教育が継続的でなかったこと、マスメディアによる中国語の影響の拡大、中国語の社会的、経済的優位性等があった。現在、ドルブットモンゴル族は、中国語、DMCL、モンゴル語の三種類の言語を使用しており、場面や相手に合わせて使用言語を選ぶ。フォーマルな場面での使用言語は中国語であり、カジュアルな場面では DMCL が多く使用されるが、モンゴル語は僅かな人によって限られた場面でのみ用いられるというダイグロシア状態が観察された（第２、７章）。

(2)「言語の絡み合い」によって生まれた言語－DMCL の主な特色

DMCL はモンゴル語の文法をベースとし、中国語から語彙を大量に取り入れた言語である。DMCL の文法形態素と語彙形態素はそれぞれ異なる言語を起源としている。DMCL はこの点で、Bakker and Muysken （1994）が指摘した「language intertwining」現象と類似しており、混合言語のアングロ・ロマーニー語、メディア・レングア語、ミチェフ語と極めて近い構造をもっている。DMCL とこれらの言語は、単一の祖語を受けついだものではない点と、バイリンガルコミュニティー内部で使用する言語である点でも共通している。また、DMCL の話者は少なくとも起源言語のどちらか一つを話すことが可能である。

音韻的な面（3.3）では、DMCL のモンゴル語起源の要素はドルブットモンゴル族地域のモンゴル語と同じ音韻体系を示す。DMCL に用いられる中国語起源の語彙は、声調を失い、語の第一音節の母音にストレスが置かれる。中国語においては本来声調によって語の意味を区別するが、DMCL に取り入れられた語彙の各音節には声調の対立が認められない。中国語起源語彙の音声構造の変化は声調対立の消失のほかに、セグメントの部分にも及ぶ。語彙は中国語由来でも、韻

律面では中国語の音韻体系に沿う形になっておらず、モンゴル語の音韻体系の方が支配的となっている。

形態的な面（3.4）では、DMCL の中国語起源の語彙はモンゴル語固有の語彙と同様に様々な形態変化をもつようになる。中国語はほぼ形態変化をもたないが、DMCL の一部になると、中国語起源の名詞にはモンゴル語の曲用語尾、動詞にはモンゴル語の活用語尾などが付加され、モンゴル語の形態変化のルールが適用される。

統語的な面（3.5）では、DMCL は OV 型言語であるモンゴル語の統語規則を受け継いでいるため、中国語起源の VO 型のフレーズは様々な形で処理される。DMCL はモンゴル語の〔目的語—動詞〕という語順を継承しており、DMCL の名詞と接置詞、動詞とモダリティ助動詞、否定とヘッドの語順は中国語とは異なり、モンゴル語に従ったものである。

本研究では、以上の言語事実に基づき、DMCL が二つの起源言語（source languages）から成立っており、形態・文法は基本的にモンゴル語の形態・統語規則が適用されているという結論を得た。本研究ではさらに動詞・形容詞・名詞という主な品詞を対象として、言語接触で生じた新しい「接触言語」の振る舞いを詳しく記述・分析し、接触言語の形成メカニズムを解明することを試みた。

（3）DMCL の動詞、形容詞、名詞

第 4 章では、DMCL の動詞のうち、「バイリンガル動詞」（Muysken 2000）と名付けたタイプの動詞に焦点を当てた。バイリンガル動詞とは主に中国語起源の動詞にモンゴル語起源の接尾辞、テンス語尾やアスペクト語尾・マーカーなどが接続され、新たに作られた動詞を指し、ここには中国語起源の語にモンゴル語起源の軽動詞 [xix]「スル」をつけて構成する動詞も含まれる。DMCL の動詞の大多数は、このような新たに生成された動詞が占めている。ここでは、前者をタイプⅠ【V＋接尾辞と語尾】、後者をタイプⅡ【V/N＋xix】と分けて考察した（4.3）。タイプⅠの場合、中国語由来の動詞が動詞として借用され、モンゴル語では動詞にしか接続できない接尾辞が付加される。DMCL では動詞が借用されている事実は、「動詞が借用されにくい」という一部の意見に対する反例を提示している。タイプⅡは、言語接触研究でしばしば論じられる「ダミー動詞」が活躍するタイプの動詞である。

バイリンガル形容詞（第 5 章）の最も重要な特徴の一つは、中国語の形容詞に後続する接辞“的 de”に由来する接尾辞 [-di:] を、中国語起源形容詞のすべてに付加するという現象である（5.5）。それによって、中国語では形式・形態・文法機能の面で厳格に区別される「性質形容詞」と「状態形容詞」の区別がなくなり、中国語の形容詞の大切な文法カテゴリーが統一化される点は、言

語接触研究で指摘される「簡略化」現象の一例とみなせる。DMCL の中国語起源の形容詞に付く接尾辞 [-di:] の使用範囲は中国語の形容詞接尾辞“的 de”の使用範囲を遥かに超えており、義務的な構成部分となっている（5.5）。DMCL の接中辞 [-b-] の挿入による強意形は、モンゴル語固有語の形容詞の強意形とは異なり、文に用いられるには接尾辞 [-di:] の付加が必要となり、新たな形容詞を構成している（5.6）。

DMCL の名詞（第 6 章）はモンゴル語固有の拡張形（6.3）を用いているが、ルールの細部においてはモンゴル語との違いがみられ、モンゴル語の規則をすべてそのまま継承しているわけではない（6.3.2）。これは、二つの異なる言語の接触によって生まれた言語には独自の形態規則があることを反映している。DMCL は類別詞を持たないモンゴル語と異なり、中国語から意味が抽象化した“个 ge”「ツ」以外の類別詞を多数取り入れている（6.4.4）。

（4）言語使用と言語意識

モンゴル語カリキュラムの生徒の 6 割以上は DMCL がすでにモンゴル語と中国語の混合言語となり、「漢語化」したとみている。DMCL の使用率及び DMCL に「親しみを感じる」人は 8 割以上を占めている。中国語カリキュラムの保護者の 4 割弱はすでに DMCL から中国語への言語シフトを完成している（7.4）。

（5）混合語（ML）論争と DMCL の位置付け

第 8 章では、DMCL は混合語であることを確認した。DMCL は起源言語のモンゴル語とは異なり、モンゴル系諸言語と類似点をもつ一方、相違点も有している（8.1.1）。DMCL は Bakker（2003）と Croft（2003）が提示した ML との類似点が多い（8.1.3）。DMCL はモンゴル語から中国語へ言語シフトする途中段階にきており（8.3.2）、Bakker が提示した ML の定義に合致し、その基準を満たしている。DMCL の形成プロセスにおいては、コードスイッチングも、化石化したコードスイッチングも決定的な役割を果たしたとは考えにくい（8.2.2）。DMCL は短期間で生じた新しい言語である（8.2.2、8.3.1）。

最後に本研究では DMCL を「他の言語と同様な言語機能をもち、コミュニケーションの道具としての役割を果たしている」と位置付けた（8.4）。その上で、DMCL は中国語の影響を強く受け、言語接触（language contact）による言語変異を経て発展した独自の言語体系をもつ言語であるという結論に至った。